

「今度は文芸ミステリだ！」

『ハヤブサ消防団 森へつづく道』 書評 霜月 蒼

なんと今度は文芸ミステリだ！ と驚いたのであった。『ハヤブサ消防団 森へつづく道』のことである。前作『ハヤブサ消防団』は、池井戸作品には異色の「田園ミステリ」として話題を呼び、TVドラマ化され、第三十六回柴田錬三郎賞という栄誉にも浴した。

おさらいしておく、『ハヤブサ消防団』の主人公はミステリ作家の三馬^{みまたろう}太郎。「明智小五郎賞」を受賞してデビューしたものの、ブレイクできず苦闘していた太郎は、東京を離れて父の故郷・八百萬町^{やおろず}ハヤブサ地区に移り住むことを決めた。勧誘を断りきれずに地元消防団の一員となった太郎は、放火事件をきっかけに町に潜む闇に相對することに一。

というのが前作だった。小さな謎が大きな悲劇へ連なってゆく展開の見事さに加え、ハヤブサ地区の自然の美しさが巧みに描かれていて、ゆえに「田園ミステリ」と呼ばれたわけである。直木賞受賞作『下町ロケット』以降、きりりと引き締まった作品を送り出し続けてきた池井戸潤が見せた大らかな語り口の心地よさも魅力だった。

そんなのびやかな空気感は、新作『ハヤブサ消防団 森へつづく道』でももちろん保たれている。太郎と消防団の面々はハヤブサ地区という穏やかなコミュニティでのんびり暮らしているが、平穩では始まらないのがミステリというものであり、新たな事件が太郎とハヤブサ地区に降りかかる。今回は複数の謎が一斉に走る複層式である。

一つめは、篠原^{しのはられな}玲那という女性の死。川に転落した玲那の遺体を太郎自らが消防団の一員としてひきあげる痛ましい場面で本作は幕を開ける。彼女は直前に地元企業から解雇されていたが、シングルマザーだった彼女が息子を置いて死を選ぶはずがなかった。二つめは、改革を旗頭に町長となった元経営者・浅井^{あさいもと}素基の疑惑。イマドキの実業家として支持を得た町長だったが、パワハラ^のの噂もあり、どこか怪しいという思いを太郎は拭えない。

そして三つめが、本書を「文芸ミステリ」と呼ぶゆえん一太郎と小説家・北原^{きたはら}未南^{みなみ}をめぐる謎である。近代史に材をとったエンタテインメント小説を次々に発表する北原は、骨太な作風とメディア映えする容姿で注目を浴びていた。しかし彼女の作品にはある重大な疑念があると、文芸評論家が太郎に打ち明けたのである。しかも北原は、ほかならぬハヤブサ地区と縁があるようだった……。

思えば前作では消防団の面々をはじめとするハヤブサ地区の紹介の必要があったこともあってか、太郎の小説家生活には多くの筆が割かれてはいなかった。本書では、作家・三馬太郎がフィーチャーされる。つまり文壇内幕小説の楽しみがあるのだ。

文学賞の候補となった作家たちが選考結果を編集者たちと待つ「待ち会」の不安と期待にはじまり、文学賞贈賞式の聖地「東京會館」（ハヤブサ消防団員は名物のローストビーフをしっかりと食べている）や、文学賞の代名詞「直木賞・芥川賞」は実名で登場。太郎の受賞した「明智小五郎賞」は池井戸潤の獲った「江戸川乱歩賞」なのだろうかとか、「蛍文社文学新人賞」は池井戸潤が直木賞に先んじて受賞した「吉川英治文学新人賞」だろうか、では北原未南が受賞したという「シャーロック賞」は何だろう、など小説好きにはたまらない小さな楽しみがあちこちにちりばめられている。『ハヤブサ消防団』でも活躍した「草英社」の太郎の担当編集者・中山^{なかやまだ}洋^{ひろし}も前作以上に大活躍、「蛍文社」の文芸編集者・島岡へのライバル心をあらわに燃やし、消防団員たちと並ぶ重要な脇役に出世している。

そんな小説業界の内幕に、レギュラーキャラのコミカルな言動もまじえ、楽しく語りだされる本作だが、三つの謎が闇の深さを覗かせはじめると、徐々に重量感を増してゆく。すべてが「ある一点」へ向けて収束してゆくにつれ、大きなドラマ性が浮かび上がってくるのだ。そのドラマのスケール感と深度は、これまで池井戸作品では見なかったタイプのものである。そこで暴かれる「大きく醜悪なもの」は、太郎たちの信じる「ささやかだけれど大事なもの」に、もちろん打ち倒されることになる一池井戸流エンタメが読者に必ず保証してくれる、まっすぐな痛快感。それはもちろん本作にもあるということと言うまでもないだろう。

平穩な田舎町でもサスペンスフルな物語はいくつも紡げる。と証明するかのように、田園ミステリの楽しさはそのままに、池井戸潤は本書で文芸ミステリという魅力を盛り込んだ第二作を書き上げてみせた。第三作を期待してしまうのが人情である。なぜなら『ハヤブサ消防団 森へつづく道』のラストで描かれるのは、副題が示すように未来へとつづく歩みに思いを馳せる太郎の姿だからだ。太郎の未来を読みたくなるではないか。

霜月 蒼（しもつき・あおい）

71 年東京都生まれ。ミステリ評論家。

（初出：「小説すばる 8 月号」）